

ふくしま よしひと
福島 嘉人

いつも思うことだが…

●自治労・書記長

2017年11月、インドネシア・バリ島のアグン山が半世紀ぶりに噴火し、火山灰の影響でバリ国際空港が閉鎖して混乱が続いているというニュースが目に入った。ジェットエンジンに吸い込まれた火山灰は、内部の熱で溶けて付着して部品を損傷させることになり、過去、実際に飛行中の飛行機が火山灰の雲に入ってしまう、全てのジェットエンジンが一時的に停止してしまった事例もあったことから、運航の安全上は仕方のないことである。

火山灰は火山のマグマの性質によって成分が違うようだが、多くの火山灰はガラスや鉱物結晶が主成分であり、目や肺に入ると健康被害が生じる事があるという。火山灰により視界が悪くなったり、道路に積もると滑りやすくなったりして交通にも大きな影響を及ぼすことになる。

また、火山灰は水に濡れると粘土状になるものがあり、道路に積もった火山灰を側溝や下水に流すと詰まってしまい大変なことになってしまう。

そのように処理に苦慮する火山灰ではあるが、現在はコンクリートの材料として利用する研究がおこなわれたり、壁材として利用する事も進められているようである。

日本は火山大国で110もの活火山があり、鹿児島県の桜島のように噴火による火山灰の降灰が度々あり、その影響をニュースなどで何度となく目にしている。

しかし、そのような経験の無い都市部近郊

で火山の噴火が起き、火山灰の降灰ということになれば、都市の機能は麻痺してしまい経済も大打撃を受けることになるだろう。

そんなことにならない事を願うばかりだが、更に心配なのが地震である。日本は火山大国でもあり地震大国でもある。南海トラフ地震はいつ起きても不思議ではないと言われているし、東京直下型地震も危惧されている。

先般、防災対策に関する国の有識者会議では「南海トラフで発生する大規模地震には多様性があり、地震の発生時期や場所、規模を確度高く予測する事は困難である」として、予知を前提とする防災対策の見直しを指摘したところである。

事前に予測できないとしても、いつ何時でも対応できるように、心の準備と日頃の備えをしておくべきであるのは言うまでもない。国や行政も対策や備えをしているが、発生直後は自らの命は自らで守らなければならないのである。

一方で、2017年は大雨や台風による甚大な被害があり、7月の九州北部豪雨では家屋の浸水や道路の冠水はもとより、河川の氾濫や土砂崩れ等により甚大な被害が発生した。

1時間に100mmを超える雨が数時間降り続き大きな災害を引き起こしたが、近年はこういった集中豪雨が多くなってきたようである。天気予報の精度は上がってきていて、事前通知システムなどが整備されてはきたが、河川の氾濫や土砂崩れは予測できるものではなく、



危険な地域に対しての避難指示や避難勧告を行うのが精一杯であろう。

やはり日頃からの危険個所のチェックと異変に早く気付くことが身を守ることの最善策なのである。

また、2017年に日本に上陸した台風は4個であったが、大型で強い台風が増えているように感じる。台風の発生数や上陸数自体は大きく増えているわけでは無いし、上陸した台風の勢力は記録的には過去の方が強いものがあったが、最近の台風関連のニュースでは「過去最大級の…」とか「非常に強い勢力の…」という言葉が頻りに聞くようになったし、「強い勢力を保ったまま上陸…」ということも多くなっているようである。

台風は海上で発達するが、近年は日本周辺の海水温が上昇しており、上陸寸前まで発達しながら近づくので被害も大きくなる傾向にあるのだろう。

また、7月下旬に発生した台風5号は太平洋上で迷走し、日本に上陸して日本海に抜けて温帯低気圧になるまで発生から456時間を要し、観測史上1位タイの長寿台風となった。

世界的に見ても台風や豪雨による災害が増えているように感じるが、やはり地球温暖化や海水温の上昇が影響していると思われる。

地球温暖化や海水温の上昇は、風水害の直接の被害だけではなく農作物にも影響を及ぼしているし、海水温や潮流の変動で漁獲量が

減ってしまったり、漁場が変化してしまうことが起きている。

火山大国、地震大国、そして台風の通り道である日本に暮らしている限り、これらの自然災害を避けることは不可能である。そして、災害時に被害を全く無いようにすることは不可能であるという前提に立って、起こりうる被害を最小限にとどめ、また短期間にするという防災の取り組みが減災であり、今は防災と減災の両方の観点からの対策が行われている。「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉は用心を怠ってはならないという言葉であるが、ひとたびどこかで災害が起きるとあわてて防災グッズの購入や水や食料の備蓄に走り、自宅の耐震などに注意を払うが、時間がたつにつれて関心が薄れてくるのも事実である。

しかし、何度となく起こる自然災害は「いつかは自分の身にも…」と肝に銘じ、過去の災害を風化させることなく心に刻み、自分で出来る事はしっかりと備え、いざという時に慌てずに行動できるようにしたいものである。

毎年このようなことを書かせていただくのは、過去の災害を忘れずに教訓として生かし、備えることの大切さと、適切な対応ができるようにすることを自分自身に言い聞かせるためである。

今年こそ、平和で穏やかな年になることを祈りつつ、用心と備えだけは怠らないように…。